

伝統芸能「人形浄瑠璃文楽」の教材化への試み

川守田 礼子[†]・熊谷 浩二^{††}・小坂谷 壽一^{†††}

Trial of make teaching materials on the Japanese traditional performing art " Bunraku puppet show "

Reiko KAWAMORITA[†], Koji KUMAGAI^{††} and Juichi KOSAKAYA^{†††}

ABSTRACT

As efforts to expand and enhance education related to Japanese traditional culture, this article describes development of teaching materials on the traditional performing art "Bunraku puppet show." Issues come out of educational activities on the subject of Bunraku puppet show having been made so far are reviewed, to thereby seek an effective educational approach for realizing multilateral learning.

Key Words: Bunraku puppet show, teaching materials, Japanese traditional performing art

キーワード: 人形浄瑠璃文楽, 教材, 伝統芸能

1. はじめに

「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」(平成15年3月20日中央教育審議会答申)において、21世紀の教育が目指すべき目標の一つとして、「日本の伝統・文化を基盤として国際社会を生きる教養ある日本人の育成」が掲げられている。グローバル化が進展する中で、自国や地域の伝統・文化について理解を深めることは、日本人としてこれからの国際社会を生きていく上で、ますます重要になるであろう。日本の伝統・文化の中でも、とりわけ伝統芸能に関する学習については、学校単位での芸術鑑賞会のような単発行

事として実施するにとどまっておき、特に八戸市のような地方都市においては、能楽・歌舞伎・人形浄瑠璃文楽といった伝統芸能の直接鑑賞機会は極端に限られている。大学に至るまで一度も鑑賞体験がないという学生も少なくない。高等学校までの国語、古典、歴史、音楽の教科書に伝統芸能を収録しているものがあり、総合的な学習の時間に伝統芸能の体験学習を取り入れている事例もある。また、伝統芸能を主体とした教材開発や教育実践に取り組んでいる研究事例も見られる。伝統芸能には日本独自の伝統・文化のエッセンスが凝縮されているとともに、国や時代を超え共有可能な芸術的価値がある。文学的なテキスト解釈や一過性の鑑賞体験にとどまらない幅広い学びへの展開の可能性が伝統芸能にはある。本研究では、平成29年度開講「日本の文化」における教育実践、および、平成28年度より実施の文化講座「文楽はちのへ塾」における活動実績を踏まえ、伝統芸能「人形浄瑠璃文楽」の学習教材の開発に取り組む。

平成30年1月9日受付

[†] 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

^{††} 工学部土木建築工学科・教授

^{†††} 感性デザイン学部感性デザイン学科・教授

2. 「日本の文化」

平成 29 年度「日本の文化」（感性デザイン学科専門基礎科目、2 年選択 2 単位）で人形浄瑠璃文楽を題材とした授業を行った。受講者は 28 名であった。

同学科 2 年対象に伝統芸能に関する事前調査を経年的に行ってきたが、伝統芸能の鑑賞体験のある学生は非常に少数である。以前は修学旅行で歌舞伎を劇場鑑賞したと回答する学生が一定数いたが、最近ではそれもなくなり、テレビ等で鑑賞することもほぼない。人形浄瑠璃文楽の鑑賞体験のある学生はほとんどいなかった。高等学校までにおける伝統芸能の学習体験もほとんどない。個人的な取組として民俗芸能（神楽やえんぶりなど）または日本舞踊を習得してきた者がクラスに 1 人いるかどうかという状況である。若年層の伝統芸能への馴染みの薄さを示しているといえよう。

本科目では、伝統芸能は難しいという印象を払拭し、人形浄瑠璃文楽という芸能とその作品世界に親んでもらうことを重視して授業計画を立てた。授業計画は表 1 のとおりである。大きく分けて次のような三つのセクションを設けた。

- 1) 人形浄瑠璃文楽の概要（定義、歴史など）について理解する導入部：スライドを用いた概説と景事（舞踊劇）の鑑賞を行った。景事は、人形の動きや三人遣いの技術、義太夫節の音楽的な特徴が分かりやすく、導入として適していた。
- 2) 一つの作品世界をじっくり味わい、舞台芸術としての特性と文化的価値について考察し、他者と共有する深化部：『曾根崎心中』の作品鑑賞とグループワークによる作品紹介プレゼンを行った。グループワークでは「本作品のどこが最も魅力的か」をテーマに話し合いを行い、各々作成したプレゼンボードを用いて発表を行った。作品の魅力として挙げたのは、男女の恋愛と破綻という心中物の主題のほか、人形の演技や衣装・小道具、場面設定の効果、浄瑠

璃の語りの凄さなど、舞台芸術の諸要素全般にわたっていた。また、プレゼンボードにはキャッチコピーを付してもらったが、「二人の愛をカタル（語る）シス（死す）」「死は逃げか愛か」「二人の来来来世」などユニークなものが見られ、若い鑑賞者のフレッシュな感覚が確認できた。

- 3) 作品バリエーションを広げ、幅広い魅力を発見する展開部：時代物、世話物の名場面鑑賞と感想の共有、個々が推奨する作品の紹介カードの作成（写真 1）を行った。深化部で扱った『曾根崎心中』の人气が最も高かった。

全ての授業回でリフレクションカードを提出させた。これによると、舞台芸術のとしての特性は映像資料でも十分に伝わったようである。導入部で人形の動きに違和感を持った鑑賞者も徐々に人形の演技に慣れ、作品世界を楽しめるようになっていくことがわかった。しかし、義太夫節の理解はハードルが高く、「何を言っているのか聞き取れない」で留まる鑑賞者は、授業後半まで題材に対する興味関心を高められずに終わることが分かった。

表1 「日本の文化」授業計画

回	目的	作品
第1回	概論	—
第2回	景事鑑賞	『寿式三番叟』他
第3～6回	世話物鑑賞①	『曾根崎心中』
第7～9回	世話物鑑賞②	『冥途の飛脚』
第10回	世話物鑑賞③	『女殺油地獄』
第11回	時代物鑑賞①	『昔原伝授手習鑑』
第12回	時代物鑑賞②	『義経千本桜』
第13回	時代物鑑賞③	『仮名手本忠臣蔵』
第14回	総括	—
第15回	定期試験	—



写真1 受講者の作品紹介カード例

3. 「文楽はちのへ塾」

人形浄瑠璃文楽の学外講座として「文楽はちのへ塾」を企画し、平成 28・29 年度に定期開催した。2 年間の活動で、本講座 8 回、文楽勉強会 11 回、観劇ツアー 2 回を実施した。活動実績は表 2 のとおりである。本講座（90 分）では、『曾根崎心中』『冥途の飛脚』の二作品を取り上げ、連続講義として作品鑑賞および解説を行った。本講座の短縮版として開催した文楽勉強会（45 分）では、さまざまな切り口から幅広い作品紹介を行った。受講者数はのべ約 180 名で、連続受講者が徐々に増えた。総じて女性の比率が高く、平日夕方開催のためかシニア層が多かった。平成 28 年度の活動成果は八戸工業大学紀要論文および実施報告書（写真 2）にまとめた。



写真2 実施報告書

本講座では、鑑賞補助資料として、床文テキストと現代語訳を配布した。床文テキストには、文楽定期公演の「文楽床本集」本文を収載した。現代語訳・校注は、『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集①②』に依拠した。映像資料は、NHK「芸術劇場」を録画したもの、および、DVD『人形浄瑠璃文楽名演集』を使用した。作品概要や時代背景などに関するスライド説明と床本テキストを用いた詞章解説を行ったのち、映像資料を用いて作品鑑賞を行った。

受講者の感想をまとめると、以下のような傾向が見えてきた。

- ・ 人形浄瑠璃文楽は初めての受講者が過半数だが、伝統芸能に対する興味関心度が高く知識欲も旺盛である。
- ・ 鑑賞時間を十分にとったのが好評であった。テレビ放映で見る機会はあるが解説がないと物語を理解するのが難しいと感じていた受講者が多く、講座では作品解釈の助けとなるよう適度な解説を心がけた。初心者には分かりやすいと好評だったが、それでも浄瑠璃の詞章の理解は難しく、「事前に床本テキストもう少し読みたい」「言葉が聞き取れずわからなかった」という声も見受けられた。ただし、あまり作品解説を加えすぎると解釈の幅を狭めてしまうのではという指摘もあった。

表2 文楽はちのへ塾開催実績

本講座	日時	講座テーマ
第1回	2016年5月27日	『曾根崎心中』
第2回	2016年8月26日	『曾根崎心中』
第3回	2016年12月14日	『冥途の飛脚』
第4回	2017年2月3日	『冥途の飛脚』
第5回	2017年5月26日	『曾根崎心中』
第6回	2017年9月29日	『曾根崎心中』
第7回	2017年12月8日	『冥途の飛脚』
第8回	2018年2月23日	『冥途の飛脚』
勉強会	日時	講座テーマ
第1回	2016年9月1日	『曾根崎心中』
第2回	2016年12月7日	『仮名手本忠臣蔵』
第3回	2016年12月14日	『仮名手本忠臣蔵』
第4回	2017年1月30日	『冥途の飛脚』
第5回	2017年3月2日	『恋飛脚大和往来』
第6回	2017年4月24日	文楽の舞踊
第7回	2017年6月26日	世話浄瑠璃の魅力
第8回	2017年8月7日	夏を感じる文楽
第9回	2017年9月4日	心中事件の発端
第10回	2017年11月2日	文楽の衣裳
第11回	2018年2月3日	文楽が描く親子の情
ツアー	日時	公演
第1回	2017年2月27日	東京国立劇場小劇場
第2回	2018年2月12日	東京国立劇場小劇場

- ・ 「本物を見る」という体験の力を再認識した。浄瑠璃の文言が分からなくても、まるで生きているように動く人形の動作や太夫の声の強弱やメリハリなど芸の力で何となく理解できたとする受講者が多かった。詞章の掛詞や七五調の美しさ、大坂言葉の独特の言い回しなどに関心を寄せる受講者もいた。
- ・ 鑑賞に慣れてくると物語の主題に関心が集中した。特に恋愛事件を描いた世話物は題材として非常に興味を引いた。特にシニア層は自身の人生経験に照射したり、歌舞伎や映画やドラマなどに結び付けたり、趣味に関連付けたりするなど、能動的かつ幅広い鑑賞行動に展開させている例が見受けられた。
- ・ 初めて人形浄瑠璃文楽に触れる受講者にとっては「なぜ？ どうして？」と疑問に思う事が多く、一方的な情報提供では消化不良を起こしかねない。初心者の新鮮な発見を吸収・共有する時間を設けるべきだったのが反省点である。

4.教材化に向けて

以上の成果を踏まえ、教材化にあたっての方向性を探る。

人形浄瑠璃文楽を取り上げた大学での授業先行事例としては、大阪市立大学大学院文学研究科・文学部の特別授業科目「上方文化講座」がある。本講座は、同研究科の二十一世紀COEプログラム「都市文化創造のための人文科学研究」の一環として開講されており、「文楽を学問的体系のもとに総合的に学ぶ」という目的のもと、文学研究科教員によるアラカルト講義と文楽技芸員による実演および講義を組み合わせた内容になっている。技芸員を講師をして招くことができる大阪という地域性を活かした好例であろう。同様に、地域の伝統文化学習という目的で、人形浄瑠璃文楽を学校教育に取り入れ

ている例は、関西圏および阿波徳島地域に見られる。地理的にも直接鑑賞の条件が揃っており、専門家による実践を導入することも可能である。こうした手法は青森県での実施は難しい。

他の事例を調べてみると、限られた映像資料であっても授業展開に工夫を凝らし、人形浄瑠璃文楽の学習に効果を上げているものが見られた。例えば、義太夫節という音楽的側面に関する学習に主眼を置き、音声なしの映像鑑賞→ストーリー予測・共有→音声つきの映像鑑賞を経て三業一体の総合芸術としての理解を深める授業実践¹や、『平家物語』「平曲」との比較を行いながら人形浄瑠璃文楽の脚色・演出の特色を発見させる授業実践²などである。学生の能動的な活動を促す仕掛け、身体知を促す教育手法などを教材化のうえで参考にしたい。また、伝統芸能ではないが、白戸三平の劇画『カムイ伝』を題材に、江戸時代の社会構造や身分制度をあらゆる角度から読み解いた田中優子の「江戸ゼミ」における授業実践³も興味深い。伝統芸能を通して当時の社会や文化に迫る多角的な学びの可能性についても教材化にあたって検討したい。芸能鑑賞に留まらない学習機会として人形浄瑠璃文楽を位置づけたい。

5.おわりに

本稿の成果に基づき、今年度内に人形浄瑠璃文楽の学習教材の素案を作成し、次年度開講科目において試用する予定である。まずは「日本の文化」において学生人気の高かった『曾根崎心中』の教材化に着手する。なお、次年度以降は全学科目での開講も行き、教育実践の場を拡大したいと考えている。

¹ 嶋田由美：「卅三間堂棟由来」による総合芸術としての文楽の指導—義太夫節の扱いから文楽への転換—, 和歌山大学教育学部紀要. 教育科学, 2008.

² 多田英俊：「古典芸能」教材化への試み—人形浄瑠璃・文楽『ひらかな盛衰記』を素材として, 京都教育大学研究紀要, 2005.

³ 田中優子：カムイ伝講義, 小学館, 2008.

謝 辞

映像資料の使用をご許可くださいました一般社団法人人形浄瑠璃文楽座むつみ会に深く感謝申し上げます。なお、本研究は、平成29年度八戸工業大学特別研究助成（特定研究）によって進められた。

参考文献

- 1) 独立行政法人日本芸術文化振興会：文化デジタルライブラリー，<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>，最終アクセス 2018 年 1 月 8 日
- 2) 独立行政法人日本芸術文化振興会：伝統芸能データベース「文楽への誘い」，<http://www2.ntj.jac.go.jp/unesco/bunraku/jpl/>，最終アクセス 2018 年 1 月 8 日
- 3) 公益財団法人文楽協会：文楽協会ホームページ，<http://www.bunraku.or.jp/>，最終アクセス 2018 年 1 月 8 日
- 4) 国立劇場営業部宣伝課：文楽床本集（第 154 回文楽公演 平成 18 年 2 月），独立行政法人日本芸術文化振興会，2006.
- 5) 国立劇場営業部宣伝課：文楽床本集（第 180 回文楽公演 平成 24 年 9 月），独立行政法人日本芸術文化振興会，2012.
- 6) 国立劇場営業部宣伝課：文楽床本集（第 181 回文楽公演 平成 24 年 12 月），独立行政法人日本芸術文化振興会，2012.
- 7) 鳥越文蔵，山根為雄，長友千代治，大橋正叔，阪口弘之：日本古典文学全集 近松門左衛門集①，小学館，1997.
- 8) 鳥越文蔵，山根為雄，長友千代治，大橋正叔，阪口弘之：日本古典文学全集 近松門左衛門集②，小学館，1998.
- 9) 国立劇場：人形浄瑠璃文楽名演集 冥途の飛脚，NHK エンタープライズ，2013.
- 10) 国立劇場：人形浄瑠璃文楽名演集 菅原伝授手習鑑，NHK エンタープライズ，2013.
- 11) 国立劇場：人形浄瑠璃文楽名演集 義経千本桜，NHK エンタープライズ，2013.
- 12) 国立劇場：人形浄瑠璃文楽名演集 仮名手本忠臣蔵，NHK エンタープライズ，2013.
- 13) 大阪市立大学文学研究科「上方文化講座」企画委員会：，上方文化講座 曾根崎心中，和泉書院，2006.
- 14) 大阪市立大学文学研究科「上方文化講座」企画委員会：，上方文化講座 義経千本桜，和泉書院，2013.
- 15) 大阪市立大学文学研究科「上方文化講座」企画委員会：上方文化講座 菅原伝授手習鑑，和泉書院，2009.
- 16) 小林ゆい：日本の伝統芸能を学校教育に導入する可能性と課題—足利南高等学校総合学習「歌舞伎講座」を事例として—，日本女子体育連盟学術研究，2003.
- 17) 飯塚恵理人：大学生対象伝統芸能教材の開発—ワークショップ型講義教材とインターネットでの音源配信を中心に—，椋山女学園大学研究論集 第 38 号，2007.
- 18) 柴田芳成：「古典芸能鑑賞入門」授業の取り組み，大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究，2014.
- 19) 山本百合子：日本の伝統芸能教材の多角的な学びの可能性と課題（1）—小学校教育における狂言教材に関する実情調査と授業研究—，福岡教育大学紀要，2017.

要 旨

日本の伝統文化に関する教育の充実に向けての取組として、本稿では、伝統芸能「人形浄瑠璃文楽」の学習教材開発について報告する。これまでの人形浄瑠璃文楽を題材とした教育活動を通して得た課題を整理し、多角的な学びを実現するための有効な教育的アプローチを模索する。

キーワード：人形浄瑠璃文楽，教材，伝統芸能